

# 成人期に診断を受けた自閉症スペクトラム障害者の 対人関係における困難感

塩見理香<sup>1</sup>、畦地博子<sup>2</sup>、田井雅子<sup>2</sup>

(2022年9月26日受付, 2022年12月14日受理)

## Difficulties in Interpersonal Relationships Faced by Persons Diagnosed with Autism Spectrum Disorder in Adulthood

Rika SHIOMI<sup>1</sup>, Hiroko AZECHI<sup>2</sup>, Masako TAI<sup>2</sup>

(Received : September 26, 2022, Accepted : December 14, 2022)

### 要 旨

本研究は、成人期に診断を受けた自閉症スペクトラム障害者の対人関係における困難感を明らかにすることを目的とし、半構成的面接を実施した。得られたデータを分析した結果、自閉症スペクトラム障害者の対人関係の困難感として【他者の本心が分からず困惑する】【他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する】【他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる】【自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する】【目的のない話を継続することに苦慮する】【気心の知れた関係性に不快さを感じる】【他者とうまく関わっていくための対策に窮する】の7カテゴリーが抽出された。彼らが望む対人関係のあり様を共に考え、自身で対応できるように支援することの必要性が示唆された。

キーワード：自閉症スペクトラム障害者 対人関係 困難感

### Abstract

This study aimed to identify the difficulties in interpersonal relationships experienced by persons diagnosed with autism spectrum disorder (ASD) in adulthood. Semi-structured interviews were conducted, and the following seven categories of participants' difficulties were extracted from the analyzed data: confusion about not knowing others true intentions; worries regarding future interactions because of negatively interpreting others words and actions; feeling at a loss about prioritizing others in interactions; struggles with being stuck with their own unique ways of thinking and not being able to understand others situations; struggles with entertaining purposeless conversation; discomfort in trusted relationships; and feeling at a loss because of lack of ways to get along with others. This study suggests the necessity of engaging in discussion with individuals with ASD to gain an understanding of their preferred interpersonal relationships and support them in handling situations on their own.

Keywords: person with autism spectrum disorder, interpersonal relationships, difficulties

---

<sup>1</sup> 高知県立大学看護学部看護学科 助教  
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor

<sup>2</sup> 高知県立大学看護学部看護学科 教授  
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor

## I. はじめに

平成17年に「発達障害者支援法」が成立した。この法律では、発達障害者の社会参加の機会を確保し、地域社会において他の人々と共存することが妨げられず、地域生活を円滑に過ごすことができるように支援していく必要性が示されている。また、成人期以降の発達障害者に対しては就職に関する支援も行われるようになってきている。

発達障害は先天的もしくは幼児期に発症するものであるが、幼少期には問題として顕在化せず、青年期や成人期になって様々なストレスから精神症状が現われて、精神科の受診や診断にいたるケースも多く、そのような人々への支援の整備が課題となっている。発達障害者の中でも自閉症スペクトラム障害は、DSM-5で社会性の障害、コミュニケーションの障害、限定的で反復的な関心と行動（常同的特性/想像力の障害）の3つの発達特性が挙げられている。これらの特性から、「他者と共感ができない」「周囲の状況を把握することができない」「思ったことをそのまま発言する」などから対人関係のトラブルへとなる（本田，2017；宮岡ら，2019；傳田，2017）。幼少期に発達障害の問題が顕在化している場合は、早期からの支援を継続することによって、大人になっても臨機応変な対応の苦手さは残しつつも、深刻な精神症状をきたすことなく生活を送ることができる。一方、幼少期には問題が顕在化せず、成人期まで特性を踏まえた支援を受けることがなかった場合は、多様かつ複雑な対人関係が存在する社会生活で、独自の価値観や考え方と相まって生きづらさにつながっている。生きづらさとして、対人トラブルの要因が分からない、周囲の雰囲気を読んで行動することが苦手であることや常に人と関わるときに失敗しないように緊張していることでストレスを生じていること（宮尾，2020）や臨機応変な対人関係が苦手（本田，2017）など対人関係における課題が多く挙げられている。そのため、成人期に診断を受けた自閉症スペクトラム障害者が対人関係において抱く困難感を明らかにすること

が必要であると考えた。

## II. 研究目的

本研究は、成人期に診断を受けた自閉症スペクトラム障害者の対人関係における困難感を明らかにすることである。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン

### 2. 用語の定義

対人関係における困難感：自閉症スペクトラム障害者が社会的相互作用や情緒的影響を受ける他者との関係の中で困ったことや難しいと思うことから生じたネガティブな感情のこと。

### 3. 研究協力者

地域生活を営んでいる20～40歳代までの方で成人期に自閉症スペクトラム障害の診断を受け（二次障害の診断をされている人を含む）、対人関係における困難感を語る方とした。

### 4. データ収集方法・データ収集期間

研究協力者に対して、半構成的インタビューガイドを用いて30～60分程度の面接調査を1回実施した。面接内容は、研究協力者の承諾を得てICレコーダーに録音し、メモをとった。データ収集期間は、2019年1月～8月であった。

### 5. データ分析方法

面接で得られたデータを逐語録にし、研究協力者ごとに対人関係における困難感の語りの部分を抽出し、コードを作成した。コードの内容を比較検討し、共通性・類似性を検討し用語の定義に照らし合わせ、カテゴリー化を繰り返し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

## 6. 倫理的配慮

本研究は、高知県立大学研究倫理委員会の承認（看研倫18-15）を得て実施した。また、研究協力施設の臨床倫理委員会の承認を得た。研究協力施設と研究協力者に研究の主旨、研究参加の自由意思と撤回の自由、守秘義務とプライバシーの保護、心身の負担や不利益の配慮、受ける利益や貢献、データの管理方法、匿名性を保持した結果の公表について文書と口頭で説明した。研究の主旨を理解したうえで、同意していただける場合は、同意書に署名をいただいた。

## IV. 結果

### 1. 研究協力者の概要

研究協力者は、病院から紹介を得た自閉症スペクトラム障害者9名である。年齢は20～40歳代であり、男性7名女性2名である。診断時の年齢は20～40歳代であった。また、職業は一般就労、福祉的就労（休職を含む）、無職であった。

### 2. 自閉症スペクトラム障害者の対人関係における困難感

自閉症スペクトラム障害者の対人関係の困難感として【他者の本心が分からず困惑する】【他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する】【他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる】【自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する】【目的のない話を継続することに苦慮する】【気心の知れた関係性に不快さを感じる】【他者とうまく関わっていくための対策に窮する】の7カテゴリと15サブカテゴリが抽出された（表1）。

以下カテゴリごとに内容を説明する。なおカテゴリは【 】, サブカテゴリは《 》、素データは「 」（ ）は筆者が補足した言葉を示した。

#### 1) 【他者の本心が分からず困惑する】

【他者の本心が分からず困惑する】とは、他者

が自分に対してどのような思いをもって関わっているのか分からず困惑することである。《他者が自分をどのように捉えているかを考えると辛くなる》《他者の漂わす言動や表情の意図が分からず苦慮する》の2つのサブカテゴリが抽出された。

(1) 《他者が自分をどのように捉えているかを考えると辛くなる》

《他者が自分をどのように捉えているかを考えると辛くなる》とは、他者は自分の言動に対して否定的に捉えているのではないかと勘繰り辛くなることである。「話の内容は世間話なんですけど、ちょっとしたことでも『自分の言ったこと変だったかな』とか『変に見られてないかな』とか『普通に見えないかな』っていうのが常に頭にあって、つらかったんですね。(F氏)」「自分が発したことに対して相手はどう思ってるんだろう、人の目がすごい気になってたんです。(F氏)」と語られていた。

(2) 《他者の漂わす言動や表情の意図が分からず苦慮する》

《他者の漂わす言動や表情の意図が分からず苦慮する》とは、他者の文脈や表情の意図を理解することができずに苦慮することである。「(表情とかを見て、この人、今、冗談言ってるんだとかわかりにくいとか)すごい、わかりにくい。もやがかかっている感じです。(中略)話し掛ける人の言葉の綾みみたいな、冗談とか自分、結構、読みづらいところがあって。(A氏)」「よく無礼講ってあるじゃないですか。真に受けて、上司に言いたいこと言ったらにらまれるとか(J氏)」と語られていた。

#### 2) 【他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する】

【他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する】とは、自分に対する他者の発言や態度から否定的な感情が芽生えることで、これから先の関係性を構築することの難しさに苦しんでいる

表1 自閉症スペクトラム障害者の対人関係における困難感

カテゴリー	サブカテゴリー
他者の本心が分からず困惑する	他者が自分をどのように捉えているかを考えると辛くなる
	他者の漂わす言動や表情の意図が分からず苦慮する
他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する	他者の攻撃的な態度に傷つき関わることを躊躇する
	他者の発言をネガティブに捉え苛立ちを感じる
他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる	他者の状況を配慮しすぎて話すタイミングが分からず苦慮する
	救援を求めることに罪悪感が生じる
	自分の本心とかけ離れた付き合いに気疲れをする
自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する	押し問答になっても自分の考えを譲れないことに苦悩する
	突発的な出来事に対応できず攻撃的な態度になることに苦悩する
目的のない話を継続することに苦慮する	とりとめのない話を続けることに気疲れする
	会話をつなぐことに負担を感じる
気心の知れた関係性に不快さを感じる	親しい関係性に煩わしさを感じる
	他者が自分の時間に踏み込んでくることに不快な思いを生じる
	親しくされることに重荷を感じる
他者とうまく関わっていくための対策に窮する	他者とうまく関わっていくための対策が思い浮かばず困惑する

ことである。《他者の攻撃的な態度に傷つき関わることを躊躇する》《他者の発言をネガティブに捉え苛立ちを感じる》の2つのサブカテゴリーが抽出された。

(1) 《他者の攻撃的な態度に傷つき関わることを躊躇する》

《他者の攻撃的な態度に傷つき関わることを躊躇する》とは、相手にとっては注意程度の発言であったとしても、攻撃的な言動のように感じて傷つき、関わることを躊躇することである。『「前、言いましたよね」とか、『ちょっと、何言ってるか分かんないんで、もう少し大きな声でお願いします』って。やっぱ、結構ぐさっと来るんですよ、ああいうの。とかですかね。怖くて、分かんないところ聞けないんですよ。(D氏)』と語られていた。

(2) 《他者の発言をネガティブに捉え苛立ちを感じる》

《他者の発言をネガティブに捉え苛立ちを感じる》とは他者の発言の明確な意味が分からず被害的な思考に陥り、苛立ちを感じることである。「自分なりに相手がどう思ってるかとか、そういうことを想像するんですけど、勝手にちょっと、どうなんでしょうね。答えが分からないんですけど悪いほうに想像してしまうっていうことはあるかもしれないです。それで拒絶したり、イライラしたり(H氏)」と語られていた。

3) 【他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる】

【他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる】とは、他者を気遣った対応をすることで自分が行わなければならないことや行いたいことができなくなり困ってしまうことである。《他者の状況を配慮しすぎて話すタイミングが分からず苦慮する》《救援を求めることに罪悪感が生じ

る」《自分の本心とかけ離れた付き合いに気疲れをする》の3つのサブカテゴリーが抽出された。

(1) 《他者の状況を配慮しすぎて話すタイミングが分からず苦慮する》

《他者の状況を配慮しすぎて話すタイミングが分からず苦慮する》とは、他者が何をしているのかどのような状況なのかを考えると話し掛けるタイミングを見失い、他者と必要な話をする事ができず困ってしまうことである。「多忙な時でもちょっとタイミングを見計らって、付度っていうんですかね。これタイミングが結構難しいんですよ (J氏)」と語られていた。

(2) 《救援を求めることに罪悪感が生じる》

《救援を求めることに罪悪感が生じる》は、他者に迷惑を掛けることになるという思いから困っていることがあっても相談できず、罪悪感に至ってしまうことである。「罪悪感とか、そういうのが自分は、すごい強いから、自分でSOSを出すことは、ほとんどない (A氏)」と語られていた。

(3) 《自分の本心とかけ離れた付き合いに気疲れをする》

《自分の本心とかけ離れた付き合いに気疲れをする》とは、他者に合わすことを優先することで自分の本当の気持ちを抑えるため気疲れをすることである。「断れないことが多くて、だから自分が精神的に疲れてるって分っていても (中略) 困っている人に何もしないことができなくて、自分のことより他人を優先しますね、いつも小さい頃から。 (A氏)」と語られていた。

4) 【自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する】

【自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する】とは、自分の固有な考え方に捉われ自分の考えを優先し、他者の状況や意見を受け入れながら対応することができないことに苦悩することである。《押し問答になっても自分の考えを譲れないことに苦悩する》《突発的な出来事に対応できず攻撃的な態度にな

ることに苦悩する》の2つのサブカテゴリーが抽出された。

(1) 《押し問答になっても自分の考えを譲れないことに苦悩する》

《押し問答になっても自分の考えを譲れないことに苦悩する》とは、他者が困惑するほど一方的に話を進めてしまい他者の話を受け入れることができないことに苦悩することである。「仕事であるんですけど、『これ、お願いします』って言っても、『いや、駄目だ』っていうので押し問答になったりとか (C氏)」「まずは人の話を聞くとか。それはできないんですけど、なかなかね。私ができないんです。(中略) もうちょっと相手の話を聞いてくださいって言われたんです。私、わーって弾丸だから。 (B氏)」と語られていた。

(2) 《突発的な出来事に対応できず攻撃的な態度になることに苦悩する》

《突発的な出来事に対応できず攻撃的な態度になることに苦悩する》とは、自分の想定外の出来事に対して怒りが湧き、他者に攻撃的な態度をとってしまうことに悩み苦しむことである。「母親に『電車で途中まで来れるか』って言われて、その予定は自分の中でなかったのでもっとパニックっちゃって。電車乗ろうとしたら時間が間に合わない、時間をずらすとかってなったらおわってなっちゃってちょっと泣いちゃったんですけど。(中略) 母親にあたるっていうか、母自身が『きつい。もうこれ以上はきつい』って言われたことは結構あった。(G氏)」と語られていた。

5) 【目的のない話を継続することに苦悩する】

【目的のない話を継続することに苦悩する】とは、結論の出ない曖昧な会話を次々と展開していくことに苦悩することである。

《とりとめのない話を続けることに気疲れする》《会話をつなぐことに負担を感じる》の2つのサブカテゴリーが抽出された。

(1) 《とりとめのない話を続けることに気疲れする》

《とりとめのない話を続けることに気疲れする》とは、決まったテーマもなく気楽な会話を求められることに気疲れすることである。「作業所なんかで(雑談とか)しますが、あんまし長いとちょっと嫌になっちゃいますね。(D氏)」「『きのうテレビであれやってたね』とか、『今話題だよね、タピオカ』とか、でもそういう中身のない話していると相手は疲れてないと思うんですけど、私は逆に疲れちゃって、白黒つけたいでしょうね、何にでも。だから疲れちゃうのかもしれない。(F氏)」と語られていた。

(2) 《会話をつなぐことに負担を感じる》

《会話をつなぐことに負担を感じる》とは、会話を継続するために次々と話題を考えることに負担を生じていることである。「『うん、そうだよね』って言ってまた話が終わるから、そしたらまた、何か話題を考えないといけないかなって思っちゃうので、だからしんどいんだと思うんですね。(F氏)」「話題とか話のつなぎ方とかいう点では、ちょっと苦手かもしれませんね (J氏)」と語られていた。

6) 【気心の知れた関係性に不快さを感じる】

【気心の知れた関係性に不快さを感じる】とは、親しげに近づかれることに対して不快さを感じることである。《親しい関係性に煩わしさを感じる》《他者が自分の時間に踏み込んでくることに不快な思いを生じる》《親しくされることに重荷を感じる》の3つのサブカテゴリーが抽出された。

(1) 《親しい関係性に煩わしさを感じる》

《親しい関係性に煩わしさを感じる》とは、役割などがはっきり決まっていない他者との関わりに面倒な気持ちを生じていることである。「一問一答というか、質問されて答えるだったり、何か役割みたいなものがあるって、それに対して、それをやるっていうことはできるんですけど、例えば、学生同士でどういう関わりというか、曖昧じゃないですか、そういう関わり方っていうのが。(中略)なかなかどうすればいいかっていう (H氏)」と語

られていた。

(2) 《他者が自分の時間に踏み込んでくることに不快な思いを生じる》

《他者が自分の時間に踏み込んでくることに不快な思いを生じる》とは、自分のプライベートの時間に他者が入ってくることにに対して嫌な思いを生じていることである。「自分の時間、友達の間、逆にそうなんだって感じで見てるんですけど、何か自分の時間に、ちょっと注目されるじゃないですけど、になると『ああ、ちょっと急いで調べて、ああ、もう、私のことなんていい、いい』みたいな感じになっちゃうんですね (F氏)」と語られていた。

(3) 《親しくされることに重荷を感じる》

《親しくされることに重荷を感じる》とは、社会人として最低限の付き合いを望んでいるため、他者が気軽に話掛けてくることに重荷を感じていることである。「普通に挨拶するんですけど、ちょっと親しみを込めて『今日はあれなんですか』とか『これなんですか』とか、(他者が)聞くんですね。そうなってくると、もうちょっとドライな会話でしたいって思ったりして。(中略)ちょっと親しくされるとそれが重荷になってきて。(F氏)」と語られていた。

7) 【他者とうまく関わっていくための対策に窮する】

【他者とうまく関わっていくための対策に窮する】とは、今まで他者とうまく関わるための工夫を考えてきたがうまくいかず、対策に行き詰っていることである。《他者とうまく関わっていくための対策が思い浮かばず困惑する》の1つのサブカテゴリーが抽出された。

(1) 《他者とうまく関わっていくための対策が思い浮かばず困惑する》

《他者とうまく関わっていくための対策が思い浮かばず困惑する》とは、他者とうまく関わっていくために対策を考えてきたが思いつくすべがなく困っていることである。「大学とか学生時代く

らいなら、まだ、いろいろ創意工夫してみようみたいなことをやってたんですけど、今は、状況改善する方法が自分でも思い付かないというか (A氏)と語られていた。

## V. 考察

### 1. 対人関係における困難感の特徴

成人期に診断を受けた自閉症スペクトラム障害者の対人関係における困難感として【他者の本心が分からず困惑する】【他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する】【他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる】【自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する】【目的のない話を継続することに苦慮する】【気心の知れた関係性に不快さを感じる】【他者とうまく関わっていくための対策に窮する】の7カテゴリーが抽出された。これらの結果から、対人関係のなかでつくられる状況に応じることへの困難感について考察する。

#### 1) 対人関係のなかでつくられる状況に応じることへの困難感

##### (1) 他者の言動や表情から意図を読み取ることへの困難感

対人関係とは、二人以上の人がお互いに働き合い、反応しあうプロセスである(星野, 2006)ことから、関係を結ぶ両者が、その場で関わり合うことが必要とされる。このことから、自閉症スペクトラム障害者も、対人関係を結ぶ場面では、その場の状況を捉えて反応することが求められる。しかし、自閉症スペクトラム障害者は、その場に生じた状況に応じるといった臨機応変な対応で他者と関わるのが困難である(本田, 2017; 宮尾, 2020)。本研究結果では、【他者の本心が分からず困惑する】として、他者が自分に対してもつ思いがわからず困惑する様子が明らかとなった。また、【他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する】として、他者の発言の明確な意味が分からず被害的な思考に陥り、苛立ちを感じる様

子が明らかとなった。自閉症スペクトラム障害者は、他者との関係性の構築や維持において、他者が感じていることを理解することが困難(滝吉ら, 2011; 溝川ら, 2015; 水間, 2006)であるが、社会的関係を築いていくためには、相手の感情や意図を理解することが重要である(星野ら, 2006; 和田ら, 2016)とされる。本研究で明らかとなった、他者の発する言動や表情の意図をとらえることができず苦慮する様子は、状況に応じようと欲するからこそ生じる困難感であると考えられる。

##### (2) 状況に応じようとするものの思い通りに運ぶことができないという困難感

本研究結果から、状況に応じようとするものの、思い通りに運ぶことができず困難感を抱えている自閉症スペクトラム障害者の姿が明らかになったのではないかと考える。例えば、【自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する】では、他者に合わせようと思うものの、自分の思いを優先してしまいうまく対応できずに思い悩む姿が明らかとなった。

林(2015)は、自閉症スペクトラム障害者が一方的に自分の話や感情を優先させることで、本人が自覚しないまま対人関係をぎくしゃくさせること、また、本田(2017)は、自分の意志や予測と異なることが生じると過剰に反応し、時に他罰的、攻撃的となると述べている。今回明らかになった、状況に応じようとするものの思い通りに運ぶことができないと他者に攻撃的な態度になるという課題も、感情を調整しながら他者と関わるができないために困難感を抱いていたと考えられる。

一般的には、このような関係における葛藤において、日ごろからの関係性とその緩衝材となる。和田ら(2016)は、日常会話がスムーズなほど相手に対する満足度や親密さが高くなることから、雑談など何気ない会話は、他者との関係を円滑にするために求められると述べている。しかし、自閉症スペクトラム障害者は、意味のない会話ほど難しいと感じている(宮尾, 2020)といわれており、親密な関係が築きにくく、表面的な関係や本

音を見せない関係になりやすい(岡田,2018)ことが指摘されている。今回の結果でも、【目的のない話を継続することに苦慮する】【気心の知れた関係性に不快さを感じる】として、結論の出ない曖昧な会話を次々と展開していくことに苦悩していること、はっきりしない親しい関係性になることに対して不快さを感じていることが明らかになった。これらのことから、自閉症スペクトラム障害者は、日ごろからの親しい関係性という緩衝材がない難しい状況の中でもなんとかその場に応じた関わりをしようとしているが、自閉症スペクトラム障害者が思う関わり方とかけ離れていることに苦悩していると考えられる。

自閉症スペクトラム障害者は、社会的文脈に応じて自分を調整することが困難なことや他者の感情や状況を察して適切に反応することが苦手なことが挙げられる(林,2015;傳田,2017)。本研究結果では、【他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる】として、他者が多忙であることを察知し、話しかけることに躊躇するなど他者の行動に合やすことによって気疲れが生じることが明らかになった。これは、困難感を感じながらも必死で周囲の状況を観察し、努力して相手のペースに合わせようとしている状況であり、他者に配慮しすぎるがゆえに現状から事が進まず、困難感に陥っていると考えられる。

【他者とうまく関わっていくための対策に窮する】として、今まで他者とうまく関わるための工夫を考えてきたがうまくいかず、対策がなく行き詰っている困難感が明らかになった。他者と円滑な関わりがしたいと希望がありながらも、自分ではどうすることもできず困難感を抱えていることが見いだされたと考えられる。

## 2. 看護への示唆

自閉症スペクトラム障害者の対人関係における困難感に影響を及ぼす要因を捉え、対応するとともにネガティブな感情を軽減できるような支援が必要となる。また、自閉症スペクトラム障害者は、

社会的な関係を築こうと工夫や努力を日々重ねる中で、自身の状況の捉え方や傾向に気づき、自身にとっても他者にとっても良い塩梅の対人関係のあり様を見つけ出そうとしている。彼らが望む対人関係のあり様を共に考え、彼らの力に着目し、自身で対応できるように支援することが必要である。

## VI. 研究の限界

本研究は、成人期に自閉症スペクトラム障害と診断された9名を対象とした。職業や性別、年齢など対象者の背景も異なっていたことによりデータの偏りが生じた可能性はある。今後は対象者を増やし対人関係における困難感の特徴を明らかにしていきたい。

## VII. 結論

自閉症スペクトラム障害者の対人関係の困難感として【他者の本心が分からず困惑する】【他者の言動を否定的に捉え今後の関わり方に苦悩する】【他者を優先した関わりにより立ち行かなさを感じる】【自己の固有な考え方に捉われることで他者の状況を考えることができず苦悩する】【目的のない話を継続することに苦慮する】【気心の知れた関係性に不快さを感じる】【他者とうまく関わっていくための対策に窮する】の7カテゴリーが抽出された。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました研究協力者の皆さま、ならびに病院施設の責任者の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は、文部科学省科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号18K10356の助成を受けて実施した研究の一部である。

本研究において申告すべき利益相反事項はない。



## 引用・参考文献

- ・ 傳田健三 (2017). 自閉症スペクトラム症 (ADS) 心身医学57 (1), 19-26.
- ・ 林寧哲 (2015). これでわかる大人の発達障害, 20-29, 東京:成美堂出版.
- ・ 本田秀夫 (2017). 大人になった発達障害, 認知神経科学, 19 (1), 33-39.
- ・ 本田秀夫 (2019). 発達障害者生きづらさを抱える少数派の「種族」, 位置No.781, 東京:大日本印刷株式会社.
- ・ 星野命 (2006). 対人関係の心理学, 119-120, 東京:日本評論社.
- ・ 宮尾益知 (2020). 対人関係がうまくいく「大人の自閉スペクトラム症」の本, 16-53, 東京:株式会社PHP研究所.
- ・ 宮岡等,小川陽子 (2019). 大人の発達障害と精神疾患との鑑別と合併, 心身医学59 (5), 416-421.
- ・ 溝川藍, 安増生 (2015). 他者理解と共感の発達, 心理学評論, 58 (3), 360-371
- ・ 水間宗幸 (2006). 成人期に発達障害を告知されたケースのライフステージからの検討-語りと手記から社会性の獲得を考える-, 九州看護福祉大学紀要, 8 (1), 83-92.
- ・ 岡田尊司 (2018). 対人距離がわからない, 66-67, 東京:ちくま新書
- ・ 佐藤由宇, 櫻井未央 (2010). 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相, 発達心理学研究, 21 (2), 147-157.
- ・ 関根正, 森千鶴 (2018). 自閉症スペクトラム症を持つ人の自己モニタリング機能の活性化を促す看護介入プログラムの効果, 児童青年医学とその近接領域, 59 (1), 70-80.
- ・ 杉山登志郎 (2016). 自閉症の精神病理, 自閉症スペクトラム研究, 13 (2), 5-13.
- ・ 砂川芽吹 (2017). 成人期に自閉症スペクトラム障害の診断をうけた男性当事者が経験する困難感と対処の過程, 自閉症スペクトラム研究, 14 (2), 59-67.
- ・ 滝吉美知香, 田中真理 (2011). 自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究動向と課題, 東北大学大学院教育学研究科年報, 60 (1), 497-521.
- ・ 玉瀬耕治・角野文宜 (2005). 対人ストレスとアサーション、セルフコントロールの関係, 教育実践総合センター研究紀要, 3 (1), 37-41.
- ・ 梅永雄二 (2017). 発達障害者の就労上の困難性と具体的対策-ASD者を中心に-, 日本労働研究雑誌, 685, 57-68.
- ・ 和田実, 増田匡祐他 (2016). 対人関係の心理学 親密な関係の形成・発展・維持・崩壊, 114-149, 京都:北大路書房.

